

KINGCA WEEK 2022 感想

神戸大学病院 食道胃腸外科 向山知佑

韓国での一週間、特に三日間の病院見学を中心に感想を述べたいと思う。私が3日間の病院見学をさせて頂いたのは韓国随一の大病院、Asan Medical Center (AMC) である。見たことのないくらい立派な病院で、外観はホテルみたく、また地下階には数件のレストランやカフェ、アパレルショップを備え、さながら複合ショッピングモールのようなものである。昼食時ともなれば外来患者でごった返し、白衣を着ていなければ自分が病院にいることさえ忘れそうになるほどだ。

さて、大まかな3日間の病院見学の流れについて触れておきたい。3日のうち最終日を除いて、ソウルはあいにくの雨だったためメトロの最寄駅から徒歩10分ほど傘を差しながら歩いた。私の他にシンガポール人の外科医が胃外科を見学することになっており、彼は聞いたことないくらい早口のシングリッシュで話すのだが、冗談好きな彼とはすぐに打ち解けることができた。他にも同時期に別の診療科で実習する外国人学生が数人おり、AMCは国際色豊かでオープンな病院であることが感じられた。手術室は総数70室ほどで、胃外科の手術だけでも一日8-9件がスケジュールされている。1件目の手術は8:00から予定されており、我々はしかるべき時間に直接手術室に向かい好きな術式を自由に見学することが出来た。手術は基本的に3室並列で行われ、LDGなら縦で3件、ロボットなら2件程度で進行される。オペレーターは卒後15年以上の外科医が主で、卒後6年程度のフェローと手術助手ナース（後述）が助手をする時もある。手術助手ナース2人が助手となる場合もある。3日間すべて予定手術は17時まで完了しており、彼らのマネジメントの優秀さが垣間見られた。

彼らが上記のようなスケジュールをこなすことが出来るのにはいくつか秘訣があるように思う。まず手術の正確性・早さである。LDGであれば2時間程度で終了し、オペレーターによって手術スキルには多少のばらつきがあるものの日本の胃外科医と比べても遜色のないパフォーマンスであった。そして次に、これが一番の秘訣であると思われるが、手術助手ナースの活用である。外科医不足が原因で導入され



シンガポールからやってきた Dr. Tay と。

ることとなった彼らは、機械出しや外回りのスクラブナースとは区別されていて、手術の前

立ちやカメラ持ち、閉創を外科医と全く変わらないクオリティで行うことが出来る。胃外科に属する手術助手ナースが4人程度存在することから、彼らを上手に分配することで多列手術が可能となるわけだ。そして最後に、効率性を徹底した進行だ。オペレーターと手術助手ナース、機械出し、外回りナースのコミュニケーションは淀みなく、必要最低限で、何らかのエラーで手術が妨げられるケースが非常に少ない。欲しい機械が出てこない、モニターの向きが違う、デバイスが作動しないなど様々なトラブルが排除されている。手術をスムーズに進行させるという共通目標に基づいて仕事を淡々とこなす姿が印象的であった。



AMC 歓迎会の二次会は Signiel Seoul のバーにて。

AMC での病院見学を通じて、私は日本の「非常識」が隣国の「常識」である事例を幾つか目撃した。手術に関していえば、腹腔鏡手術中は全員が椅子に座っていたことが挙げられる。施設によってはフットスイッチなど問題もあると思うが、人間というもの立っているより座っている方が楽なはずであり、折角外科に興味を持っている学生や研修医でも長時間立っていることに苦痛を感じる者は多く、少しでも彼らの歓心を得るためにも奨励すべきである。他にも、術後のレントゲン撮像を行わないという「非常識」にも出会った。この「椅子」と「術後レントゲン」の話はシンガポールも韓国と同じで「全員座っている」し

「撮像しない」らしく、我が国でも見直しが必要ではないかと思う。そしてもう一つ、書類業務に関してだ。これも日本のビジネスシーンにおける代名詞的な悪習であり、韓国人にもよく知られるところのようだ。AMC では紙仕事が圧倒的に少なく、各種同意文書はタブレットで電子署名、手術記録もすべてクリックとタイピングで事が済むようになっている。手術記録は病期や使用デバイスに至るまですべてタブからの選択式あるいはチェック式であり、定型的な手術内容であれば文章入力も省略される。これらは確かに手術のアウトカムに大きくかわる問題ではないが、我々の労働環境をより良くするという大きな意味を持っている。リモートワークの拡大と働き方改革の潮流に乗って、外科医を取り巻く環境も改善されることを期待したい。

韓国胃癌学会での口頭発表は、私にとって初めての海外発表であり幾分か緊張を強いられた。驚いたことに、いや彼の国の英語教育を考えれば至極当然かもしれないが、韓国人医

師は英語が流暢な人が多い。発音や口調は圧倒的に日本人よりも格上であり、国際的なコミュニケーションでの発信力において彼らより秀でるのは難しいのではと悲観せざるを得ないほどであった。

今回 KINGCA WEEK 2022 に参加させて頂き、数多くの気付きと刺激を得ることが出来た。ぜひ今後も韓国や他国への学会参加を奨励して頂き、日本の医療にどんどん外部からの風を吹き込む切っ掛けとなって頂きたいと願う。



掛地 吉弘教授（中央）と医局の先輩である山田 康太先生（左）と。